



週)報

2013~2014年度))) R I会長)ロン)D・バートン)
『ロータリーを实践して)みんなに豊かな人生を』
))))))))))第 2570 地区ガバナー)中)井)眞)一)郎)

国際ロータリー
第 2570 地区

狭山中央ロータリークラブ

〔例会場〕狭山東武サロン〒350-1305) 狭山市入間川 3-6-14)TEL)04-2954-2511
〔事務所〕〒350-1305)狭山市入間川 1 -24-48)TEL)04-2952-2277)FAX)04-2952-2366
<http://www1.s-cat.ne.jp/schuohrc/E> - mail:schuohrc@p1.s-cat.ne.jp
会長)栗原憲司) 会長エレクト)稲見)淳))副会長)高田虎光) 幹事)宮野ふさ子

【第 3 グループ内の例会日】 狭山(金)、新狭山(月)、入間(木)、入間南(火)、飯能(水)、日高(火)、狭山中央(火)
所沢(火)、新所沢(月)、所沢西(水)、所沢東(木)、所沢中央(月)

第 996 回(6 月 10 日)例会の記録

点 鐘 栗原憲司会長
合 唱 四つのテスト
第 2 副 S A A 柴田君、田中(隆)君

出席報告

会員数	出席者数	出席率	前回修正
35 名	31 名	87.10%	96.37%

会長の時間

栗原(憲)会長

梅雨に入ってここ数日間、雨の日が続いております。家の庭には、くちなしの花やどくだみの花が咲いており、いかにも梅雨らしい感じがしております。

先日 6 月 8 日(日)に、千代田区永田町にある日枝神社の山王祭に行きまして、日程は 7 日~17 日までで、8 日には、日枝神社境内の茶園に、狭山茶の茶業協会が昔持っていた苗を植えた茶畑があるのですが、その境内茶園並狭山新茶奉納奉告祭という式があり、狭山市茶業協会の副会長として 10 年ぶり位に参加してきました。今年は奉納祭が 40 回という節目にあたるということで、狭山市長も列席し、狭山新茶の奉納をいたしました。

境内の狭山茶園のお茶は、5 月の新茶の時期に摘み、製造し、奉納することになっています。また奉納祭の午後からは「稚児祭り」という行事があり、入れ替わりのように子供たちが沢山入ってきて、非常に賑やかでした。天気もそれほど悪くなく、境内には大きな茅の輪が飾ってあり、それをくぐって来たりしました。お昼にはたくさんのお酒等が出され、楽しい一日を過ごすことができました。

山王祭の一番大きな行事は、6 月 13 日の神幸祭だそうで、山車がねり歩くそうです。パンフレットがありますので、神幸祭のみどころを紹介させていただきます。



1.国会議事堂

朝一番に迎える見どころスポットで、国会議事堂の傍を行列が通過。

2.麹町大通り

麹町大通りを四ツ谷方面へ、朝の上智大学や四ツ谷駅を抜けていく。

3.日テレ通り

道路幅が狭まり御列に近い麹町日テレ通り。細かな装飾などをチェックしてみよう。

4.靖国神社南門

通りを横断する靖国神社前。王朝絵巻の全景を堪能できるビュースポット。

5.国立劇場

国立劇場前に着輦し、駐輦祭を齎行。御鳳輦二基と宮神輿一基が、一挙に並ぶ。

6.国会議事堂(桜田門)

政治中心国会議事堂と、王朝絵巻のコラボレーション。

7.法務省旧本館

明治の雰囲気をも今に伝える赤レンガを背景に。

8.皇居坂下門

神幸祭の大目玉、皇居坂下門。丸の内ビル群を背景に 3 基の鳳輦・神輿が神々しく並ぶ姿は圧巻。

9.東京駅

復原された東京駅へ一直線に伸びる行幸通り。江戸と大正と現代が交錯する名シーン。

10.丸の内仲通り

新緑の丸の内中通り。お洒落なランチやお茶を楽しみながらのお祭り見学もグッド。

11.三菱一号館

和洋折衷が素晴らしい、三菱一号館とのコントラスト。

12.銀座中央通り

かつて巡幸ができなかった銀座中央通りも必見のポイント。

13.帝国ホテル

日本ホテルの代名詞、帝国ホテルと御列の共演。

14.日比谷公会堂

日比谷公会堂と御列のコラボレーションも見ど

ころのひとつ。

15.日枝神社

神幸祭の締めくくりは、日枝神社への還御。迫力の一瞬。

前回行ったときには、日枝神社の石段を上っていくところを見まして、その時の迫力には非常に驚きました。

幹事報告

宮野幹事

先週土曜日に地区の役員会、日曜日には米山記念奨学会の学友の総会がありました。

地区の役員会は、田中さんと沼崎さんもお出席されていましたが、2時間、縦割りの色々な委員会を、横との連携をもう少し密接にして合理的に回りたいという趣旨のもとに行われたのではないかなと思うような役員会でした。

また米山記念学友会は、当地区で奨学金をあげていた人達が卒業した後に米山の学友となりますが、その学友さんと現在の学生さん、そして浜野さんにも出て頂きましたが、カウンセラーさん、会長、幹事、中には米山委員の方、皆で懇親を図ろうと、毎年6月に、全員が自己紹介をするという形でパーティーが行われました。

1. ガバナー月信(6月号)について
2. 「高校生社会体験活動」受け入れ事業所募集について
3. 次年度地区補助金承認について
4. 入間川七夕まつり協賛について
5. 受贈会報
飯能RC 所沢東RC 所沢RC

「会員卓話」・・・・・・・・

「征途日記」 辻 達彦 著より
(元海軍軍医少佐 群馬大学名誉教授)

守屋昭夫会員

先ほど会長が日枝神社の話をしておりましたが、昔日枝神社の下に山王ホテルがございまして、現在は取り壊されておりますが、2.26事件の舞台となりました。日本の歴史の中で色々反乱はありましたが、最近ではこれが一番大きな反乱で、私はちょうど小学生の頃で、ちょうどその頃、仙台に親が転勤しておりましたので、仙台でラジオを聞き、非常に驚きました。

本書は私ども守屋夫婦が10年程前、著者から寄贈されたものである。

私は1927年(昭和2年)生まれである。実は明日が誕生日で、87歳となる。昨年は私が病院を開設していつの間にか50年も経ってしまったので、これを機会に内々でそのお祝いをし、仕事の区切りをつけようと、長男に理事長を譲り、かなり気が楽になった。実質的には自由な時間もあるので、趣味らしいことをやってみたり、以前読み残していた本もあるので、あらためて書棚をのぞいたりもしていた。

先日本書を手にして見たところ、扉の裏に著書の、謹呈とした紙片が張ってあった。曰く「ごあいさつ、旧稿を整理して頭書の本を作りました。できればみなさまの書架の片隅におさまることを祈念する老境です。」とあった。日付は平成17年6月10日、つまり月日は本日であった。あらためて心して読ませて頂いたが、若い頃、辻氏が体験した、大東亜戦争の緒戦となったハワイ島攻撃戦の生々しい記録であった。しかも余りに知られていない潜水艦によるハワイ島包囲作戦であった。空母や戦艦による派手な攻撃はトラトラトラの電文でも知られている有名なものであるが、潜水艦隊による(辻氏によると計24隻に達した)1ヵ月以上の水面下の作戦は、余りに知られていないものと思われるので、この機会に辻氏の貴重な体験をお伝えしたいと思った。

さて辻氏の略歴であるが、1916年(大正15年)、茨城県・水戸生まれ。1940年(昭和15年)大学医卒、同年9月~1945年(昭和20年)海軍軍医として従軍、潜水艦乗務。昭和19年3月より太平洋パラオの海軍病院勤務。昭和20年8月終戦、同年12月内地へ帰還。1946年(昭和21年)~1954年(昭和29年)国立公衆衛生院に勤務、1954年~1981年(昭和56年)群馬大学医教授、1981年~1987年日本歯科大教授、1952年ハーバード大学留学[医学博士]。

ついでに私事になるが、辻氏は私にとっては同学同門の尊敬すべき10年先輩であり、私の家内は両親が水戸出身で親戚であり、幼い頃から目をかけてもらっていて、出征のときも、アメリカへ留学のときも横須賀や横浜へ送りに行っていた付き合いがあった。

辻家は又、代々水戸藩に仕えた医師の家系であり、本人は父の背中をみて育ち、迷わず医師になったという。大学を卒業した時は、当時できたばかりの公衆衛生院へ入り、伝染病の研究を目指していたが、当時は大陸の方が風雲急をつけており、そのままであれば、徴兵制度のあった時代のため、当然陸軍の方へ引っ張られる運命があった。辻氏はそれならばむしろ海軍の方がいわゆる「話の分かる」、より自由度があるということで志願したのである。

当時横須賀へ行き、入隊、軍医中尉任官、海軍軍医学校入学、3ヶ月卒業、海軍工機学校附、次いで潜水戦隊へ、大学卒業の翌年9月(昭和16年)には思いもよらず、潜水艦伊号第2に乗艦を



命ぜられた。2ヶ月後には 作戦として、11月16日 ?へ向ふ(出港)となり、この「征途日記」を書くに至ったのである。

征途日記 太平洋上にて(抜粋)

(昭和16年11月16日~同17年2月1日)

11月16日12:00 母港をたつ。

出港用意のラッパとともに、徐々に起動。手を振り、帽を振り、互いに別れを惜しめり。運命の何たるかをしらざらむも、おもふはくにのためのみなり。涙あふるるが如くなりしは如何にせむ。薄暮の不二山がみえたり。互いにかたらいて、名残を惜しめり。右に大島をみつつ、吾、再びこの山をみうるやいなやは知らざるも、この美しき姿、忘れることはあらず。

11月18日

やや、がぶり始めたり。波又、波、海又、海、只水鳥の遊ぶをみ、無心なるをしる。遂に、故国を去りしの感深く、一瞬一刻、死地に到りつつあるをしるも、又呆然として夢見るがごとし。

11月20日

風あまりなきも、波浪激しく艦橋まで飛沫を浴びる。水原秋桜子の俳句論読み始めたり。

「星空に太平洋はこわきもの」

「人間と死」読了。何かしら不惜身命の境地に至れりと自負せり。人間は死すべくあるらし。

11月22日(6日目)

巨浪依然おさまらず。かぶること変りなく艦橋にあるも、飛沫を浴びること再三。太閤記をよみ感あり。「死なうは一定 人生僅五十年 化転のうちには比ぶれば 夢幻のごとくなり」

戦国武士の死生観には、おそろしきまで徹せるものあり。よみて慄然たり。そろそろ敵飛行機の哨戒範囲なり。○九一五遥拝式あり。はるか西を向きて、一入感あり。

11月29日

明日より日夜長時間の潜航とのこと、風ややあたたかになれり。一夜母を夢む。うれしさがぎりなかりき。

12月1日

対米方針決定せるもののごとく、わが運命既に決せり。長時間潜航せるも苦痛を感じず。炭酸ガス20%。

12月4日

潜航に馴れり。夜食のみたのしみなり。

12月5日

もう3週間で正月。妙な気がする。裸で扇風機をかけて暮す師走は初めてなり。太陽をみずに夜から夜への生活。

12月6日

今日より三食共潜航時にとることとなれり。

昨夜、X(開戦指令)来れり。我々の運命を決すべき奇怪なるXの存在である。

12月7日

戦ひの前夜、感なし。死ぬことありとて、父母の眠る國へ行けると考えたら立命の境地を見出し

えたと思ふ。皇國の興廢將にこの聖戦にかかれるを知れり。

12月8日

明くれば眩古の記念すべき開戦の日。心境不変。艦内嬉々として戦果を談ずるあり。

12月12日

艦内特に変化なし。ややつかれたり。戦いはながきかも。なお1ヶ月の予定。がっかりした。「垢いづる我が身愛しも潜みいて南の海に星をながむる。」

12月15日

今日もまた、生命ありけり。母港へかへる日はいつぞや。ハンスカロッサの「フェルワンデルング」を読み始めた。

12月17日

カロッサの「幼少時代」再読。林芙美子の「放浪記」も再読し始めたり。

12月20日

昨日は、ありがたくないプレゼント20数発(爆雷攻撃)。生死一如としれるも心安らかならざりき。偶感

「よれよれと、かぎりなく垢のいでくるこの手肢かも。こする手をふとやめて 肉をみつむる。紅き血のひそひそともりあがりくる。我が命かなしかりけり 戦いのさなかよ いのち いまだありけり。我が呼吸なおもつづけり 今日もまたいくたびか 爆雷をうけなむ 新しき年をまじかに」

12月27日

駆逐艦の追跡をうけたり。物凄ききわみ、生色なく將に死を決せり。直上弾数発。皆至近弾なり。「敵近し 爆雷防御と命せらる 防水扉閉め配置につきぬ 圧上がり ガス混濁し息くるし 艦内声なく ひたくぐりゆく 声あり 聴音手のみかくなれば 浮上砲戦やむなしと 砲術長は刀をいだきぬ」

12月31日

カフルイ砲撃(カウアイ島の地名)効果不明。一戦速でにげだす。

1月元旦(昭和17年)

異海にて、初めて新年を迎ふ。

○五一五遥拝式、深度40m。昼食時、聖寿万歳を三唱、お神酒をくみて賀春。

「かにかくに元旦なりともぐりけり」

夜敵空母出撃の報に接し、俄然活気を呈しきたり、追跡に移り、一戦速にて快走。

1月2日

依然たり。敵影をみず。追う身は快く、追われるものはつらきかな。敵飛行艇らしきものを認め急速潜航せり。

1月6日

3号は如何?(伊3号潜水艦、味方の僚艦は無事であった。)

1月8日

爆雷攻撃を受く。追跡さること数時間。危く脱するを得。生命ありけり。

1月10日

またしても空母見ゆとの報あり。追跡にうつる

1月12日

爆雷攻撃をうけたり。空母サラトガに魚雷2発命中。伊6号(僚艦)が損傷を与えた。

1月13日

空爆一瞬逃れたり。哨戒飛行艇の由、5,6000米高度低。生きているのが奇異な位。戦いの中で初めて真の自我を認識しえた。自分は弱い人間であるらしい。海中で生命の危険がひしひしと身に迫り来る時は、戦慄を覚える。生死をくぐること二度三度、やや不感になりきたるも、追われたる時の気分は、他に比較し得ざるほど絶望的である。陸上の戦斗よりも数倍の凄惨さと不気味さを有する。

1月15日

事もなく、暮れにけり。なつかしくも、また苦難多かりし、ハワイを去りつつあり。わが命、失せんとして遅しくも生き経てきたれど、将来を思い、いささか惘然たり。

1月17日

明日より昼間水上航走とのこと。まさに49日に及ぶ長時間潜航なり。偉業なり。

「命ありて 我祖国にかえらむとす 経てきたるみち危かりし 幾度か目をつむりて死を想へりたくましくも 生きしもの しづやかに ふるさとに 近づかむとするか」

1月22日

十一〇〇前進基地(マーシャル諸島 クエゼリン)入港。

夜は久しぶりでビールをのみ談ず。愉快なり。

1月23日

補給あり。ビールを飲む。香取(巡洋艦)(第6艦隊旗艦)へゆけり。

1月24日

基地出港 横須賀へ

1月30日

冬シャツを着る。扇風機は昨日より不要となれり。

2月1日

「吹雪して 雪粉々ととび 霰降り霏々として 風頬を撃つ この横須賀の海に われら奇しくも かへるいのちありて 祖国をみつめ ゆるぎなき大地に下り立ち 言葉拳ぐるなく 涙落つ」

補注

伊号第2潜水艦について

日本海軍最初の巡洋潜水艦で大正15年に就役した型の2番艦である。これは艦隊と行動を共にして作戦するのではなく、単独に遠洋を長期に

わたって行動する。そのため速力よりは航続力が重視され、航続距離は10ノットで24,466海里。兵装は14センチ砲2門、53センチ魚雷発射管6門と強大であった。昭和19年4月7日ビスマルク諸島イサベル水道で戦没した。潜水艦はもともと敵の巨艦を想定して戦斗するので、人間を意識する余裕はなかった。はっきり言えば、敵の顔を見ることは絶無であり、これは陸戦との差異かも知れない。

のこのパラオにおける海軍病院勤務での闘い(空襲)は、アメリカ軍というよりは飢餓との果てしない闘いであった。開戦当初の我が海軍の潜水艦作戦で、真珠湾包囲に参したの24隻に達し、そのすべてに軍医の配乗があった。乗艦の潜水艦伊号第2の士官は辻氏を含み6名であったが、その後の作戦で、艦長以下3名が戦士した。

以下は内容が異なるので、本作戦以外は割愛した。

)
)
)



宮野君 親愛なります守屋パスト会長、卓話楽しみにしております。

稲見君 守屋パスト会長、今日の卓話楽しみです。

沼崎君 前回の6月3日、例会を完全に忘れ、無断欠席しました。年のせいでしょうか、恐ろしいことです。今後気をつけます。

夫人誕生祝 片山君

次の例会

第2副SAA 吉川君 吉松君

6月24日(火) 12:30~13:30

クラブ協議会 退任挨拶(会長・幹事・副会長・会長エレクト・SAA)